

Find hidden clues from current denture for new denture

現義歯から読み解く 新義歯への手がかり

～義歯診断トレーニング～

松田謙一 著





現義歯分析：読み解ける“キー”

まず、本症例では現義歯を見て、“主訴を予測”するトレーニングを行いたい。臨床経験の豊富な読者の中には、すぐに患者の主訴を理解した方もおられるのではないだろうか。

まず上顎義歯を見ると、臼歯部人工歯の外側の義歯床がかなり幅広く見える。3|3の前歯部のアーチとの連続性を考えると、小白歯部のラインは内側へ入っている。言い換えると、臼歯部人工歯がかなり内側に位置していることがわかる（図7の①）。続いて下顎義歯では、人工歯の排列位置の舌側限界としてよく紹介されるパウンドライン（犬歯近心隅角とレトロモラーパッド内側縁）よりもさらに内側に人工歯が排列されているように見える（図8の②）。そして、第一、第二大臼歯部の舌側面をよく見ると、人工歯の形態がフラットになっており、同部の舌側面を歯科医師が何らかの目的のために切削したものと推察される（図8の③）。

続いて粘膜面を見てみる。上顎義歯には小さな気泡が多く存在し、黒色の汚れが多く見られる。また床の色調の違いから、常温重合レジン材料による直接リラインが行われていると考えられる（図9の④）。下顎義歯では、床面積が小さく、特に右側や前歯部では非常に幅が狭くなっている（図10の⑤）。さらに、舌小帯やアーチから考えられる解剖学的正中と下顎前歯部正中が若干ずれていることもわかる（図10の⑥）。

正面観は口角鉤をつけている状態であるが、頬粘膜や義歯床縁の位置から考えると、バッカルコリドー（頬側回廊：微笑時に口角と臼歯の間にできる空間。大きすぎると同部が暗く影となり、審美的に良くないとされる）が大きいのではないかと推察される（図11の⑦）。舌側面から見ると、特に右側の臼歯部ではオーバージェットが非常に少なく、左側の小白歯と第二大臼歯では舌側咬頭の咬合が失われているように見える（図12の⑧、⑨）。



- ① 上顎臼歯の排列位置が内側に寄っている
- ② 下顎人工歯の排列位置がパウンドラインよりも内側にある（破線）
- ③ 下顎大白歯舌側が切削されている（赤線）

図 7, 8 現義歯の咬合面から得られる情報

著しい咬耗による 咬合接触の喪失を 認める症例

症例概要

患者：70代の男性。

主訴：「最近，奥歯で噛めなくなってきた。また少しずつ上顎の義歯が外れやすくなった」として近医から紹介来院された（図1～7）。

現病歴：現在使っている義歯はいつ製作したか覚えていないが，少なくとも5年ほどは使っている。作った当初から下顎の義歯が外れやすかったが，何とか使っていた。ところが，最近徐々に噛めなくなってきたと感じ，さらに上顎も外れやすくなってきたと訴えている。



Memo

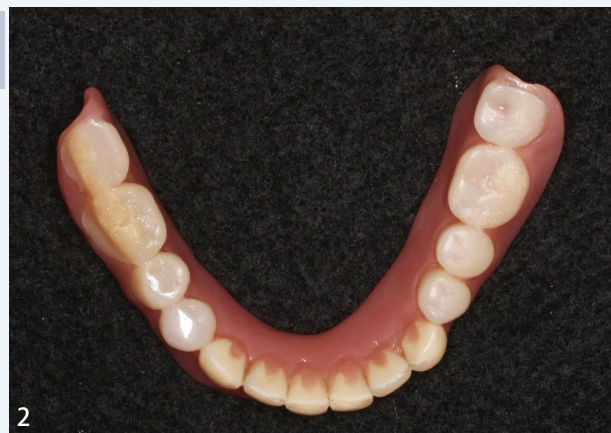


図 1, 2 現義歯, 咬合面観



図 3, 4 同, 粘膜面観



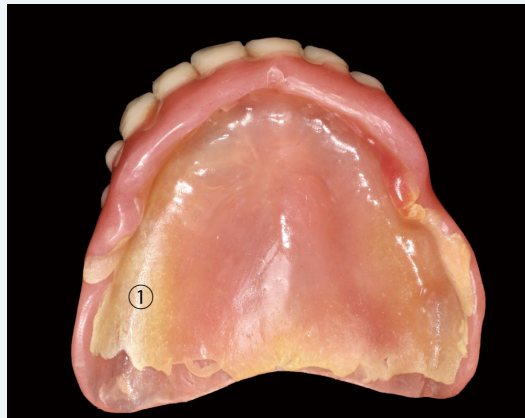
図 5 ~ 7 同, 口腔内での咬合状態および左右側方面観



現義歯分析：読み解ける“キー”

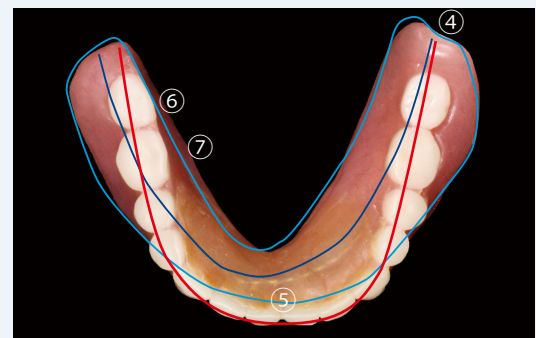
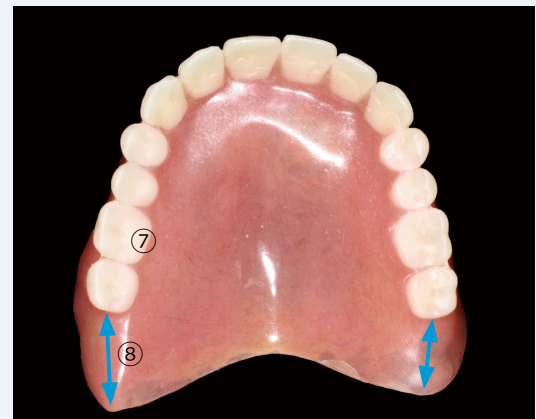
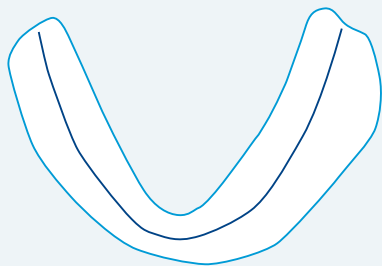
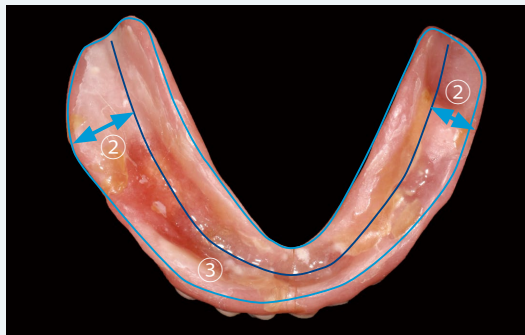
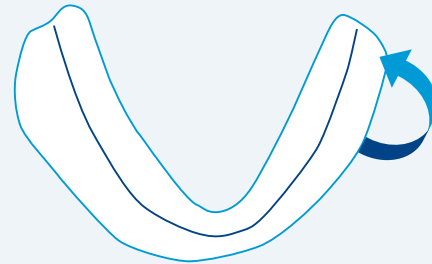
読者諸兄は現義歯の写真（図1～7）からどのような情報を得ることができただろうか？

一見して、上下顎とも粘膜面に何らかの裏装が行われていることや、下顎義歯の破折の既往はわかるかと思うが、その他にも症例を読み解くヒントが実に多く含まれている。



- ① 上下顎ともに粘膜面に義歯安定材か粘膜調整材が裏装されている
- ② 下顎臼歯部の義歯床の幅に左右差がある
- ③ 下顎左側犬歯部付近の床縁が厚い

* 床縁と歯槽頂のトレース線を左右反転させて咬合面観へ重ね合わせる



- ④ 人工歯のアーチ（赤）と顎堤頂のアーチ（青）との不一致
- ⑤ 下顎正中部の破折
- ⑥ 下顎右側第一，第二大臼歯部の切削
- ⑦ 上下顎の両側臼歯部の咬耗
- ⑧ 上顎両側臼歯部遠心と義歯後縁との距離の差

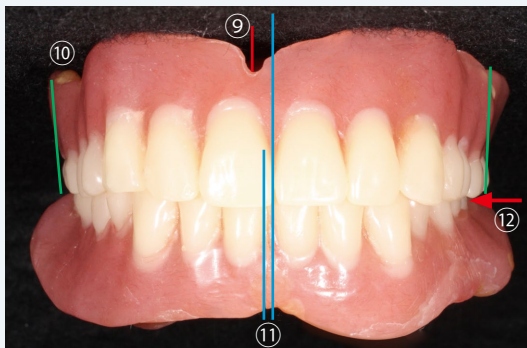
図8 現義歯の咬合面観から得られる情報

では、図8～10を見ながら、得られた情報を整理していきたい。

まず粘膜面観を見ると、前述のように上下顎ともに義歯安定剤あるいは粘膜調整材が裏装されていることがわかる（図8の①）。どちらも変色しており、その状況も良好とは言えない。臼歯部の床縁を見ると、顎堤頂から頬側への床縁の長さは右側では短く、左側では長くなっており、左右でかなり異なっているように見える（図8の②）。また、床縁をよく見てみると、左側の犬歯相当部の床縁がその他の部分に比べてかなり厚くなっている（図8の③）。

続いて、咬合面観を見ていきたい。粘膜面観の下顎義歯床縁のラインと歯槽頂のラインをトレースした後、左右反転して、咬合面観の写真に重ね合わせることで、顎堤頂のアーチと人工歯のアーチを比較することが可能となる。その結果、本症例では明らかに両アーチが左右方向に大きくずれていることがわかる（図8の④）。下顎前歯部には破折を修理した跡があり、補強構造の埋入とレジンの変色が確認できる（図8の⑤）。下顎右側第一、第二大臼歯人工歯の舌側は大きく切削されているように見える（図8の⑥）。臼歯部咬合面は5年程度の使用により、咬耗が進んでいる（図8の⑦）。上顎両側第二大臼歯遠心と義歯後縁との距離には左右差があり、右側が若干前方に、左側が若干後方に排列されているように見える（図8の⑧）。

次に上下顎義歯を最も安定している状態、いわゆる義歯における咬頭嵌合位で咬合させて正面観から見ると、上唇小帯と人工歯の正中の位置が一致しておらず、人工歯の正中が左側に位置している（図9の⑨）。ただし、上顎の義歯床縁の位置と臼歯部頬側の位置関係を見ると、大きなずれは認められない（図9の⑩）。また、下顎の人工歯の正中は上顎に比べてわずかに右側にずれていることがわかる（図9の⑪）。同様に、臼歯部をよく見ると、左右でオーバージェットが異なり、オーバージェットは左側のほうが大きいようである（図9の⑫）。



- ⑨ 上唇小帯と上顎前歯正中との位置のずれ
- ⑩ 上顎義歯床縁と大臼歯部頬側との位置関係に大きなずれは認められない
- ⑪ 上下顎前歯の正中のずれ（下顎が右側へ寄っている）
- ⑫ 両側臼歯部のオーバージェットの違い（右側よりも左側のほうが大きい）

図9 同、咬合状態の正面観から得られる情報